教室ディベートの形式

入門期における丁寧な指導

一言でディベートと言いますが、学校の授業で行うものを「教室ディベート」とします。この場合、ディベート・マッチそのものは、教室ディベートにおける一つのプロセスに過ぎません。

肯定側・否定側に分かれて論じ合うことがメインであることは確かです。しかし、それまでに至る準備段階も、その後のアフター・ディベートの段階も重要です。教室ディベートは、すべてを含んでいるからこそ、学校教育で行う意義があります。

反対に、もしディベートを討論としてのみ考えると、この学習は非常に視野の狭いものになってしまいます。適切な評価もできなくなります。

初めて教室ディベートを取り入れる場合、一連の流れに沿って丹念に進めるのは、なかなか骨の折れることです。しかし、急がば回れと言うように、丁寧に一通りのことを行うことで、情報収集や論理構築の要領がわかり、次回からは、簡便に行うことができるようになります。また、様々な変形や応用、パネル・ディスカッションなどへの発展も可能になります。

ディベートが停滞気味なのは、入門期の丁寧な指導を行わずに、最初からディベート的な活動、ディベートもどきの学習を取り入れてしまうことに一因があるのではないのでしょうか。事前の準備段階とアフター・ディベートの段階が薄いのです。あるいは、アフターがなく、やりっ放しの場合もあります。その結果、ディベートに教育的価値を見出せないのです。

ディベートの本質的精神

教室ディベートにおいては、そのやり方や進め方にはいくつかの形式があります。ディベートは形がどうであろうと、その本質的精神が生かされていればよいと考えます。様々な形式に習熟して立派なディベーターを育てることが指導の目的ではありません。

日本の教室で行うことに視点を置くならば、日本的教室ディベートとして新しいディベートの型が示されても不思議ではありません。例えば、1時間で2回行うことのできる簡便なプログラムや同時に多数の生徒が参加できる形態などです。

入門期における教室ディベートの形式

このような考え方に立った上で、初めて行う入門期の教室ディベートの形式、フォーマットとして以下の形式を採用しました。

肯定側の立論	3分
否定側の立論	3分
作戦タイム	2分
否定側の反対質問	8分
作戦タイム	2分
肯定側の反対質問	8分
作戦タイム	5分
否定側の最終弁論	2分
肯定側の最終弁論	2分
判定と講評	5分
	計40分

立論は、事前に3分以内で収まる原稿を準備しておきます。最初の2分間の作戦タイムでは、立論により相手側の出方がわかったことを受けて、反対質問の追加や修正、分担の確認などを行います。

最終弁論前の5分間の作戦タイムでは、事前にある程度は準備しておいた最終弁論の原稿を追加、削除、修正しながら完成させます。時間との戦いとなります。あるいは、その場で原稿にはないことを話すことも想定されます。したがって、4人のメンバーの中でも、考えながら話すことができる人物に最終弁論を託すことになるでしょう。

なお、入門期では、「ディベート・レジュメ用紙」として資料を配布し、ディベートを行うのが効果的です。レジュメの存在が、ディベーターの説明を補うことになり、判定員の理解を促進することにもつながります。